

## “川から学ぶ” 地域学「子ども環境会議」

通船川・栗ノ木川の通信簿（参加：3小学校）

新潟市立沼垂（ぬったり）5年生・東山の下5年生・牡丹山4年生

通船川・栗ノ木川ルネッサンス

（略称：通栗ルネ）

代表 星島 卓美

### 目標（川のある街づくり）

信濃川と阿賀野川が歴史を連れ上流から土砂を運び作り上げた平坦なデルタ地帯に水郷（地図にない芦沼）と呼ばれる亀田郷（約1万1千<sup>人</sup>）があり、約3分の2が標高ゼロ<sup>の</sup>地域と言われている。

そこに暮らした私たちの先祖は、川の恵みを受ける一方、毎年、雪解け水や梅雨よる洪水で水との闘いに明け暮れ地域を守るため人々は知恵を出し合い助け合い協働の力によって防災を伝えた地域の学び（地域学）があった。

昭和39年（1964）年に起きた新潟地震によって通船川は液状化、排水機能が失われ大きな被害を受け以後、河川改修では、堤防を築かず阿賀野川・信濃川より約1,75<sup>cm</sup>水位を下げ上流の津島屋と下流の山の下に閘門（舟運のため閘門（舟のエレベーター）設置）排水機場で通船川と栗ノ木川下流部の排水を受け持ち地域を水から守っている。

一方、低水路のため自然流水ができなく浄化用水として阿賀野川から毎秒2<sup>ト</sup>の水を通船川に流し込んでいるが、農業排水・家庭雑排水・下流部の工場排水等で汚い・臭い・危険な川になり、人々から見捨てられたしまった。

そんな中、平成4年、通船川・栗ノ木川ルネッサンスを結成、通船川・栗ノ木川を再生して川のある街づくり（水の都）を目指した活動を展開した。私達の取り組みは、公民館やNPO・大学教授等の協力を得て、市民に参加を呼びかけ通船川再生の手法として川辺散策から体験を通して五感で学ぶ様々な学習をを実施した。学習は市民に大変好評で、マスコミの取材もあり行政も注目するようになった。

平成10年6月、河川管理者の新潟県の呼びかけで通船川・栗ノ木川下流再生市民会議（つくり市民会議）が誕生（当会から副会長）。その直後8月4日の集中豪雨は時間雨約97<sup>mm</sup>、観測史上初の豪雨で通船川に被害が集中、排水能力を越え川が溢れた。災害防止のため山の下排水機場の増設と周辺整備に市民の意見「ワークショップ」の手法を取入れた新しい川づくりが県・市によって整備され始めた。

## 未来に向けた持続可能な取り組み

平成15年、市民参画による新しい川の再生とともに川を活用した地域づくりも始まり、川辺の小学校の先生方に呼びかけ川の歴史を学ぶことは地域を学び地域共生社会の再生につながる総合的学習の取り組みを提案、同時に、子ども達の活動を記録集に編集製本して子ども達や関係者に配本することで、未来に向けた持続可能な循環型取り組みとして学校と住民・行政参画型、かつての地域学再構築を目指したいと説明した。幸いに、沼垂（ぬったり）小学校5年生・東山の下小学校5年生・牡丹山小学校4年生など3小学校が取り組みに手を上げた。

### 取り組み会議

16年にスタートした子ども環境会議も4回を数えた。出来れば10回まで継続したい。10年経てば最初の子も達も大学生又は卒業して社会人として子ども時代に経験したことをボランティア活動で子ども達に伝えていると思われる。

平成20年、今年で5回目の取り組みに、財団法人：北陸建設弘済会さんより取り組みに掛る費用助成が決まった。

早速、5月、3小学校総合学習担任の先生・公民館職員・当会役員で総合学習の取り組みについて意見交換を図った。各校の先生方は新たにに取り組む先生、引き続き取り組む先生もいるが4年間続けていると先輩から引継ぎが出来るため話が通りやすく、持参した各校の活動テーマに添った要望をお聞きして可能な限り先生の要望を重視した段取りをする。

取り組み期間は、5月頃から11月を目途に出来るだけ多く体験を通した学習を進めるよう要望。

体験を通し、地域の歴史・生き物や川辺の植物・水質・ゴミなど興味を持った子ども達でグループを作る。調査学習段階で専門家の指導が受けられるよう当会のネットワークから手配をして、子どもに分かりやすいよう具体的に説明してもらう。など、出来るだけ先生方の要望を中心に意見調整、取り組みを始める。サポーターとして学校からPTAに協力を住民には公民館から参加呼びかける。当会の会員は案内・説明・体験指導役を務める。

### 川から学ぶ“身近な環境”

子ども達にとって大切な話として、川は地域の歴史に始まり川は生活に欠かすことが出来なかった過去の話に興味を持たせることから始めました。地域の話し上手なお年寄は、手振り身振りで小道具など持参で自身が子ども時代を思い起こしながら川で魚やシジミを獲って焼き魚や味噌汁にしたり、洗濯をしたり、今は、お風呂の水は水道を使うが、その頃は水道が無く川から水汲んで

お風呂に使うのが毎日の仕事で、その仕事は少年の仕事であった。遊びすぎて水汲みが遅くなると親に叱られた。通船川も栗ノ木川も、今では考えられないくらいきれいな水が流れていたと話して聞かせる。

その話を聞いた子ども達は、信じられない～。そして質問が次々と飛び出す。～それなら船に乗って川を探検してみよう。～

大形漁協さんの協力を得て船外機付ボート（漁船）を貸切り山の下閘門船付き場から国土交通省信濃川下流河川事務所関屋出張所から借用したライフジャケットに身を包んだ子ども達は興奮しながら船に乗り込み船頭さんの注意を聞きながら静かに上流に向かう、上から見た水質は濁っていたが船上からでは比較的綺麗に見え濁りに気が付かない。途中、イカダを引いた船に出会ったり、サギや水鳥が飛び立ち、魚が跳ねたり、その度に子ども達の歓声が上がりメモを取る。始めて乗る先生も興奮ぎみ、貯木場に浮かんだ南洋材の丸太の大きさに驚いたり、川辺の緩斜面・船付き場・整備された遊歩道の一部など、どれを見ても新鮮に感じ取り、やがて津島屋閘門に到着、阿賀野川に出るためには水位の調整が必要である。子ども達は初めての閘門体験である。

#### ○ 11月までの学習内容（記録集から牡丹山小学校の例）

牡丹山小学校の校区、その外れに通船川という川があるます。川べりは鋼矢板でし切られ、めったに近づくことはありません。しかし、1学期に社会の学習で「水道」についての学習をし、私たちの飲んでいる水は、阿賀野川から来ていることを知りました。そこで、阿賀野川と、そこにつながる校区の川、通船川について、船下りと水質調査をすることにしました。

8ヶ月に及ぶ、通船川とのふれあいのはじまるです。

#### ○ 通船川と阿賀野川の船下り

5月、私たちは社会の学習で、上水道や下水道について学習しました。私たちの飲んでいる水は、阿賀野川から来ていることを知り、大変驚きました。また、校区にある排水溝は、通船川に続いていることを知りました。

6月に入り、通船川や阿賀野川の様子を実際に見てみようといううことで、船下りをすることにしました。着慣れないライフジャケットを身に付け、いよいよ通船川探検の始まりです。

最初は山の下閘門から栗ノ木川を上りました。水しぶきが上がると、なんだかいやな臭いがしてきました。川の色は灰色や茶色に濁っていて、黒く見えるところもありました。そして、船は工場の裏手に進んで行きました。通栗ルネッサンスの方に言われて川の水に触れて見ると、川の水なのになんだか温かく感じました。工場で使われた、機械の冷却用の水が放流されているからだそうです。

船を進めていくうちに、スクリーンで水の底から黒いものが湧き出てくるの

に気付きました。この正体がどうやら「ヘドロ」といわれるものらしいです。

それから貯木場へと進みました。そこでは、普段は見る事が出来ない船からの目線でいろいろなものを発見することができました。いろいろな水鳥や川を泳ぐ魚の影などです。はじめのうちは気になっていた川の色や匂いもなんだか薄らいできた気がした。

### グループづくり

この様にして、気付いた子ども同士がグループをつくり調査をします。

調査グループ班は以下の通りです。ヘドロ－15名・水質－17名・魚類－19名・野鳥－28名・地図づくり－10名・植物－9名・歴史－5名・水中生物－16名・陸上生物－11名・ゴミ－2名・貯木場－9名・ポンプ場（排水機場）－1名。このようにして12月の子ども環境会議の発表に向け調査をします。追及して12月に行われる子ども環境会議で発表します。

### 12月の第一日曜日は「子ども環境会議」を開催

会場を設定、市民に参加を呼びかけ3校合同で「子ども環境会議」を開催。各校代表の子ども達がグループ別に調べたデーターを基に発表し、会場と意見交換して参加者と情報を共有する。

### まとめ

その成果をまとめたのが、**2008年 第5回 “川から学ぶ” 「子ども環境会議」～通船川・栗ノ木川の通信簿～**として2500冊を製本。参加した子ども達をはじめ学校関係者・ご協力を頂いた方々・全国の川愛護団体等に配本致しました。

この活動を支えていただいた、多くの方々を始め、財団法人 北陸建設弘済会様には心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（記録集が必要な方、120円切手同封でお申し込み頂ければ発送致します。

申し込み先：〒950-0871 新潟市東区山木戸3-3-15 通船川・栗ノ木川  
ルネッサンス充て)